

## ペスタロッチの児童観

下山田 裕彦

戦後我々は児童憲章によって、児童を大切に育み、尊重し、人格として尊敬せねばならないことを学んだ。

しかし何故、児童は愛と真実の中に生まれなければならないか、人間として尊ばなければならないかという思想的根拠は一体何であろうか。

第一に、我々は児童、特に幼児の中に人間としてのあるべき理想を見出すからである。「罪を知らず、死を恐れず、素直で、無邪気で、疑いを知らない子供の心こそ、人間の本当のあるべき姿だ<sup>(注1)</sup>」と言える。

第二に、しかしながら、「子供は弱者であり、無力者であるという事実そのものの中に、子供を大切に<sup>(注2)</sup>する思想的根拠がある」と言えよう。

ところで、我々が、以上の二点がどのようにして歴史的に確立されてきたかをみようとすると、どうしても、ルソ、ペスタロッチ、フレーベルの児童観を知る必要がある。児童観の確立は教育史上、この三人によってなされたといっても過言ではない。

そこで私は今回、ペスタロッチの児童観をみることによって、子供が尊重されねばならないという思想的根拠を更に一層深く知りたいと思う。

ペスタロッチは教育史上偉大な業績を残した教育実践者、教育思想家であったが、彼の教育史上の遺産は果して何

であったかについては必ずしも一致した評価がなされている訳ではない。

私は特にペスタロッチが貧しい子供たちを集めて教育し、人間として尊重したその根拠や動機に深く感動するものであるが、そのことを特に彼の児童観を中心にまとめてみたいと思う。

ペスタロッチの初期の作品に「育児日誌」があり、これは三才六ヶ月になるヤーコブをルソーの「エミール」にならって観察した実践記録であるが、ルソーの感化を受け、ルソーにならないながらも、ペスタロッチ自身の教育思想が次第に形成されてゆく過程を知ることが出来てその意味では貴重な作品である。ペスタロッチは確かにルソーの影響下にあったが、更にルソーを超えてペスタロッチ独自の思想を展開した教育思想家であった。

それは彼が聖書的人間観の基盤に立ちながら、いつも人間への問いを問い続けたからである。我々はそのことを彼の初期の作品である「育児日誌」を通して知ることが出来る。

ルソーの影響を受けて、「エミール」にまねた「育児日誌」だけに、次のような一節は確かにルソーの継承者であることを、自ら宣言しているかのごとくである。「君は大自然の自由な講堂へ、君の子供の手をとって連れてゆくだろう、君は山や谷で彼を教えるだろう……小鳥の囀りが注意を喚起したり、珍しい虫が木の葉の上を這ったりしている時には、君の言葉の練習を中止せよ」<sup>(注3)</sup>

ここで言う自然とは天然という意味での自然である。このような言葉の背後に、当時の学校教育が教室にあって教授問答による暗記に終始していたことを我々は読みとらねばならない。即ち、ペスタロッチは、「子供に知識を強要するな」<sup>(注4)</sup>という。彼がその意味において暗記による教育を退け、子供自身の自由な、自発的な教育をより重要視した理由は十分根拠のあることであって、時代を超えた卓見であった。そして、「自由は子供の心に平和と沈着と喜びを注ぎこむ……」<sup>(注5)</sup>のである。しかし、同時に彼は教育における従順をも主張した。即ち、「従順なしにはいかなる教育

も不可能だ」という。(注6) 確かに、自由なしに教育はあり得ないがその自由は教育者への素直な従順となる時、自由の自由たる由故が発揮される。自由と従順は表裏一体をなした概念である。換言するならば、教育者への信頼、愛がない所に教育はあり得ないのである。「自由は善であるが、従順も同様に善である」ことをペスタロッチはくり返して強調するのである。「育児日誌は」一七七四年、「夕暮」に先だつこと五年、ペスタロッチの思想がまだ明確に形成されない時期の作品である。しかし我々はここに、ルソーの影響下にあるペスタロッチが彼独自の教育思想を展開しようとする息吹きを感じとることが出来る。

前述したように、ペスタロッチが単なるルソーの継承者でないことは、ペスタロッチが自覚的に聖書的人間観に立って、人間教育の本質を問いただしたことにある。我々はそのことを、彼の処女作「夕暮」にはっきりとみる事が出来る。

ルソーの影響下であり、ルソーの教育に共鳴しながらも、ペスタロッチが次第にルソーを超えて、彼独自の教育思想を展開するのはそれから五年後、「夕暮」に於てであるが、彼はそれまでの五年間に、貧兒、孤兒を集めてノイホーフに開いた貧民学校を解散せねばならないという痛ましい失敗をなめた。その挫折の中から、彼が未来に希望を托して書き上げたのが「夕暮」である。執拗なまでにペスタロッチが、人間の本質を追求しなければならなかった理由はここにある。即ち、彼がノイホーフで子供たちと共に働らき、学び、考えさせられたことは、真の人間教育とは何であるだろうか、ということであった。

私は今、ペスタロッチが苦悩のどん底から、誠実に問い続けた人間教育を、特に児童観を中心に考えてみたい。

彼は、「何故人間は、休息と人生の喜びである真理を求めないのか？」人間を根底において満足させるような真理を求めないのか……(注8)と問いながら、「母の乳によって満ち足りている赤ん坊は、自分にとって母親は何であるかを

この真理への道によって学び、感謝の本質である愛を、彼の心の中に生じさせる。」(注9)

ペスタロッチは幼児に必要なものは「感謝の本質である愛の心」であり、それは「母の乳によって満ち足りている赤ん坊」にのみ生れるという。ペスタロッチの教育思想において母親は神の代理人という重い、高い地位にまで位置づけられているが、子供はこのような母の愛のいぶきに触れることによって、「母親が何であるかを学び」、自らの心に「愛の心」が生れる。

このようにみる時、ペスタロッチの児童観は常に母との関連で把握されていることが理解できる。

「人間とは何者であるか、彼が必要としているものは何であるか、人間を高めたり、低くしたりするものは一体何であるか……」(注10)と、たたきこむように彼は人間の本質を追求するが、彼が究極的に辿り着いた解答は、「神の親心・

人間の子心、君主の親心・国民の子心、それがすべてのしあわせのもと」(注11)と副題に言っているように、人間を常に關係的存在として把握していることである。他者との関わりの中で、人間は教育され、又、教育する存在である。その意味で人間は教育的存在であって、その根底は、親心・子心の呼応關係であると言わねばならない。

その親心の内容は愛であり、子心の内容は信頼である。換言するならば、人間が教育的存在である、ということとは、愛と信頼の關係で裏付けられねばならないということである。それ故に、母と子の關係は、親心・子心の呼応關係であり、愛と信頼の關係であると言える。ペスタロッチにみられるこのような人間把握は、彼の深い神への信仰から生れた。(注12)「子心と従順は完成した教育の結果や、その後の成果ではない。それは、人間形成の初期の、かつ、最初の基礎でなければならぬ。」(注13)というペスタロッチの言葉は、その意味で注目に値する。

ここにみられるペスタロッチの教育思想は、ルソーの教育思想を超えた彼独自のものであり、我々はそれを、ペスタロッチが、聖書的人間觀の基盤に立ちながら展開した教育思想と評価してよいであろう。

更に彼の児童観を具体的に知ることに出来る作品は、「ゲルトルート子供教育法」や「幼児教育書翰」などである。私は更に、彼の児童観を正しく理解する為にこれらの作品をみてゆきたいと思う。

「ゲルトルート子供教育法」は、「頭」と「手」と「心」の教育論を展開した作品である。私は特に、子供の心に「愛の心」が生ずる過程を中心にみたいと思う。

ペスタロッチは、「私はどのようにして、人間を愛し、信頼し、人間に感謝し、従順になるのか?……それは主に、子と母との関係から生れることを知る」<sup>(注14)</sup>

「母は子を育て、はぐくみ、守りそして喜ばす」一方、「子供ははぐくまれ、喜び愛の芽は子供の中に成長する」<sup>(注15)</sup>

ある時、まだ子供が一度もみたことのないものが子供の目の前に現われる。すると子供は驚き、恐れ、激しく泣く、母は子供をしっかりと胸に抱き、子供と戯れる、子供は泣きやみ、やがて微笑む、そして、信頼の芽が子供の心の中に成立する。<sup>(注17)</sup>

又、ある場合に、母は子供の要求を知り、子供のもとに走り寄る。子供は母の足音を聞いて安心し、母を見上げて手をさし出し、やがて母の胸に抱かれる。この場合、「母」ということと満足ということとは、子供にとっては同一である。そして子供は感謝する。<sup>(注18)</sup>

愛・信頼・感謝の芽は、このようにして、思慮深い母の愛によって、子供の心に成長してくる。

しかし、ペスタロッチが人間として持つべき、もう一つの大切なことからして強調する、従順の心は、ゆっくりと時間をかけて生じてくるのである。さきにも見たように、ペスタロッチは、教育における従順を、自由と同程度に強調した。それは、自由と従順があたかも双子のごとく、相即不離の概念であるからである。

それならば従順の心はいかにして子供の心に芽ばえるのだろうか?

「忍耐によって初めて従順になる」<sup>(注19)</sup>とペスタロッチは言う。

たとえば、子供が暴れ、泣き叫ぶが、母は子供のわがままな欲望に屈しない。そして次第に子供は自分の意志を母の意志に従わせるようになる。こうして忍耐の最初の芽と、従順の最初の芽は成長してゆく。<sup>(注20)</sup>

かくて我々は、愛の対象である子供、信頼の対象である母親が、彼の言う親心、子心の関係であることが理解出来る。

即ち、親心とは子供を愛する母親の心であり、子心とは母親の愛に信頼をもって呼応する子供の純な心である。

その意味で子供の教育は、頭脳や理性による仕事ではなく、感覚と心情の仕事であり、母の仕事である。換言すれば女子の仕事である。<sup>(注21)</sup>

我々は初期の作品である「育児日誌」と中期の作品である「ゲルトルト子供教育法」を比較する時、ここに著しい思想の展開がみられることに気付く。

彼の児童観は「ゲルトルト子供教育法」において、きわめて具体的に確立されてきた。それは彼が「育児日誌」や、「夕暮」以来、全存在をもって問い続けてきた人間教育の本質が見事に結晶したと言ってよいであろう。私は最後に、晩年の作である「幼児教育書翰」を一瞥して彼の児童観が最後に辿り着いた点をみきわめたいと思う。

「幼児教育書翰」は、イギリスのグリーヴスに宛てた手紙の形式によるものである。

原典は失われてしまっているが、英訳によるものが残り、それが更に、独訳されている。一八一八年、十月一日に第一信が書かれ、一八一九年五月十二日付の第三十四信で終わっているこの作品はペスタロッチの円熟した時期のものであるだけに、彼の児童観を知る上には貴重な作品である。

ペスタロッチはここでも幼児を母との関連で理解する。即ち「母はその子供の発達において、重大な役割を演ずる

資格を附与せられている」(注22)

「しかもその資格たるや、造物主自身によって付与せられている」(注23)

その母親の子供に対する教育を根底から支えているものは、「母性愛、思慮深い愛」(注24)である。ペスタロッチは言っている。

一方、「児童は人間性のすべての能力を賦与されているものであるが、しかしその能力はいづれも発達しておらないので、いわばまだ開いていない芽のようなものである。その芽が開くとおのおの葉が開いて、開かない葉は一枚も残らない」(注25)それは、「神はあなたの子供に人間の本性に関するすべての能力を賦与している」(注26)からである。

ここに、ペスタロッチがすべての子供を尊重する根拠がある。

子供は、神の与え給うた贈物であって、何人と言えども、これを粗末に扱うことは出来ない。愛をもって子供を親切に扱うことが、子供を尊重することである。それ故に彼は、「親切こそは、確かに有力な原理である」(注28)

「愛情こそは、最古の目的を達する最も容易な道である」と言う。

そこで、ペスタロッチは教育の目的を、「人間をその創造者に奉仕して、良心の命ずるところに従って活動させること、社会に関しては、彼を独立自主にならせることによって、彼を有用にし、個人としては、彼を内面的に幸福にすることである。」(注29)と結論づける。

彼の児童観は、初期の作品である「育児日誌」「夕暮」から中期の作品である「ゲルトルト子供教育法」を経て、晩年の「幼児教育書翰」に至った時、きわめて明確に確立されてきたことが理解できる。

そして同時に、「子供らを信仰に導き、信仰から愛へ、更に愛から幸福へと、その子供らを導く母親の幸福さよ！」(注30)

と云って、母親であることの幸福と責任を付け加えることを忘れていないのである。

ペスタロッチは、人間を個人的にはなく、常に他者との関わりの中で理解するが、その根底には常に、神と人間との呼応関係が基礎づけられている。

更にペスタロッチが子供を人格として尊重した思想的根拠は、子供は母親のものではなくて、実に神のものであるが故に、何人と言えども、子供を人格として尊重せねばならないという彼の信仰に立っていることを我々は記憶せねばならない。

児童を尊重する思想的根拠は、ペスタロッチにとって、それが聖書的人間観の結論であったからである。

ルソーを超えたペスタロッチの教育思想、就中、その児童観は、教育史上、その意味できわめて特異な位置を占めると言えよう。

それは同時にペスタロッチの教育史上の遺産であり、ペスタロッチに対する我々の評価でもある。

私はそれを機会を改めて、フレীবールの児童観との対比において更に考察してみたいと思う。

### 注

- (1) 矢内原忠雄「教育と人間」二〇三頁
- (2) 右 同 二〇四頁
- (3) 佐藤守訳「育児日誌」(平凡社ペスタロッチ全集第一巻所収)二二二頁
- (4) 右 同 二二八頁



- (5) 右同 二三四頁
- (6) 右同
- (7) 右同 二三五頁
- (8) Pestalozzi : Abendstunde, S. 2.
- (9) elenda
- (10) ditto, S. 1.
- (11) ebenda
- (12) 拙稿「ペスタロッチ教育思想の基底にある人間観の特質について」(東京教育大学大学院教育学研究集録第五集所収)
- (13) Pestalozzi ; ditto, S. 12.
- (14) Pestalozzi ; Wie Gertrud ihre Kinder Blehrt. S. 293—294.
- (15) ditto S. 294
- (16) ditto S. 295
- (17) ditto S. 294
- (18) ditto S. 295
- (19) ditto S. 295—296
- (20) ditto S. 296
- (21) ditto S. 306
- (22) 皇至道訳「幼児教育書翰」(平凡社ペスタロッチ全集第十三卷所収) 一四九頁
- (23) 右同

- (24) 右同  
 (25) 右同 一五二頁  
 (26) 右同 一六二頁  
 (27) 右同 一八六頁  
 (28) 右同  
 (29) 右同 二七四頁  
 (30) 右同 二八五頁

参 考 文 献

- (1) Heinrich Pestalozzi, *Gesammelte Werke*; Achter Band. 1946, Rascher Verlage Zürich
- (2) 長田新編「ペスタロッチ全集 第一卷、第十三卷」平凡社一九五九年
- (3) 矢内原忠雄「教育と人間」東大出版会 一九六一年
- (4) 東京教育大学大学院教育学研究集録第五集、六集